（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学用）

熊本県立宇土高等学校　令和2年度（2020年度）学校評価表

1　学校教育目標
熊本県教育委員会の「令和2年度（2020年度）県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「令和2年度（2020年度）人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、本校建学の精神である「質実剛健」のもと100年の伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。 全職員は教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

2　本年度の目標
①全職員が資質と指導力の向上及び授業改善に努め、生徒一人一人を理解しその個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び考え行動する、逞しく生きる力を備えた将来のリーダーを育成する。 ②中高一貫の6年間及び高校3年間教育課程研究を推進し、宇土校ならではの教育活動を展開する。 ③地域の小中学校等との連携をより一層深め学校の見える化を図り地域に開かれた学校づくりに努める。

3　自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	自己評価	成果と課題
学校経営	業務改善	生徒一人一人と向き合う時間確保の工夫	校務の精選と業務時間の見直し	・校内連絡システム（Chat & Messenger）を活用して会議を削減する。 ・校内Lan・Web等を活用した個別の職員研修を推進する。	A	・校内連絡システムを効果的に活用して、諸会議の削減、縮減ができた。 ・校内LANやWeb等を用い一斉研修ではない隙間時間を活用した研修を実施し、生徒と向き合う時間の確保ができた。
		生徒一人一人の実践的な思考力を養成するUTO-LOGICの推進	ICTを活用した探究の問いから始まる学びサイクルの確立	・職員3人一組で、対話法を活用した授業手法を実践する。 ・遠隔授業を想定し、全教科全領域でICTを活用した授業づくりを推進する。	B	・職員3人一組での授業手法交流実践は全体の85%が実施でき、授業改革に繋げることができた。 ・Google Classroomを活用した授業づくりは教科によってまだ差があるが、全教科全領域に向けて新たな授業づくりが推進できている。
	働き方改革	風通しの良い職場環境づくり	教職員の意識改革と業務の平準化	・教職員と面談や働き方等の情報提供を行い意識改革を図る。 ・衛生委員会・運営委員会を定期的に開催し、業務の精選や平準化について検討する。	B	・教職員同士でコミュニケーションを取りながら効率的な業務の遂行を果たすことができた。 ・衛生委員会を定期的に実施し、職員の個別の勤務データの検討や、長時間勤務者への健康チェック、働き方の意識変革の資料提供等行うことができた。
		教職員の健康増進及び福祉の確保	部活動の計画的な運営と積極的な年休取得	・部活動の活動計画を作成し、ホームページに掲載する。 ・年休が取得しやすい職場環境の構築と計画的な年休の取得の推進を図る。	B	・部活動の年間活動計画を作成し、ホームページに掲載できた。 ・積極的年休取得に向けて定期的に呼びかけ、全職員平均で、年間10日の目標を上回り、11.5日の年休取得に繋げることができた。
学力向上	授業の充実と学習意欲の向上	全ての生徒が意欲的に授業に参加する授業の実践	生徒の理解度・満足度90%以上の達成	・授業時数の確保 ・研究授業の充実 ・探究型授業の推進 ・授業評価の改善	B	・休校期間があったが、授業時数は昨年並みに確保できた。 ・3人1組の授業研修も広がりを見せ、生徒への授業評価における授業満足度も90%近い。

	自学力の育成	宅習時間の確保と内容の充実	・宅習時間の確保（高1・2年＝週1000分　高3＝週1500分） ・定期考査の平均点の向上（全教科・科目で平均55点以上）	・オンライン授業を含む自宅学習指導の工夫 ・宅習時間調査の集計化の工夫 ・行事の精選と考査前の学習時間の確保	B	・グーグルクラスルーム等を活用したオンラインによる課題の指示が各教科で進んだ。 ・自宅学習時間は目標まで少し届いていないが、定期考査の成績不振者は昨年度より減少した。
キャリア教育（進路指導）	自己の発見とキャリアの基礎構築	自己の強み発見	自身の個性・強みを考えた目標設定度９０％以上	・進路希望調査 ・年3回以上の面談の実施 ・部会等での情報交換	B	１年生は文理コース分けのガイダンスを行った。進路希望調査や模試の結果を分析し、学年会で学力検討会を行い情報を交換した。
		将来を見通したキャリア構想	職業を見据えた進路目標の設定度９０％以上	・オープンキャンパスへの参加 ・インターンシップ ・卒業生による合格体験談	C	今年度はWebオープンキャンパスや進学説明会に積極的に参加するように推奨し、振り返りシートに記録を残した。
	一人一人の進路目標の達成	進路意識の向上	学年に応じた進路LHRの充実、新入試・新課程を見据えた進路情報提供	・進路ニュース、進路の手引きの発行 ・進路講話、ガイダンス ・大学の出前講座 ・進路資料室の利用促進	B	外部講師による講演会・出前講義の代わりに、１年生の希望者を対象に、夢ナビライブ講義動画を視聴させた。熊本大学や鹿児島大学の説明会を本校の教室や「Zoom」を使用したオンラインで実施した。
		個に応じた指導の充実	教師の教科指導力および進路指導力の向上	・Nステ・ゼミ・進取会の実践、模試の詳細な分析 ・進路検討会、業者の研修会・入試分析会参加 ・入試問題研究	B	進路検討会は参考資料、ICTの活用など工夫を加えた。１月末現在で進路決定者は９４名（４１．２％）となり、推薦入試では、小論文や面接指導を全職員で取り組むことができた。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	服装・あいさつ・時間厳守の徹底	全職員による生徒指導と生徒に寄り添った配慮ある対応の実践、充実度８０％以上	・遅刻月３回以上者指導 ・学年集会時の整容検査と事後指導の徹底 ・生活委員会によるあいさつ運動の実施	B	遅刻月３回以上は１年生１名で回数も多く指導した。服装検査等の学年の温度差も無く、学期に2回クラス単位で実施し、事後指導まで徹底でき大変良かった。挨拶運動は本年度は１回の実施であった。
		交通ルールの遵守とマナーの向上	交通ルール遵守率８０％以上、交通事故・苦情１％以内	・職員、交通委員会の定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作成と掲示 ・交通安全教室の実施	B	交通関係は交通事故2件、苦情は１２件と１％以内の達成はできなかった、今後も引き続き指導する必要がある。交通安全教室は本年度は見送った。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営	生徒会主催の行事の企画・運営の充実、アンケートによる満足度９０％以上	体育祭中止に変わる記念レクリィエーションの成功、文化祭、クラスマッチの見直しと、より一層の充実	A	コロナ過の中で、体育祭の代替え行事として、傘文字プロジェクトは成功に終わった。文化祭も生徒会中心で例年とは異なる、動画・展示発表のみの半日開催で見事成功した。
		各種委員会活動の活性化	目標の明確化、生徒自ら動く委員会活動の実践、達成度８０％以上	・生徒会執行部の主体による各種委員会の開催と合同会議の企画・立案 ・各種委員会の主体的な活動による活性化	B	体育祭の代替え行事、文化祭の内容変更などの各行事における生徒会や委員会活動は充実したが、委員会活動の年間の継続が不十分であった。
人権教育の推進	命を大切にする心を育む教育の推進	自尊感情の向上。他者に配慮した行動の実践	人権学習LHRの充実	人権教育LHRの事前学習と改善へ向けた反省・改善の機会を充実させる。	A	LHR教材として、ハンセン病施設入所者の絵画の鑑賞を中心にスライド教材を製作し、実施した。次年度は全クラスで担任が実施できるように事前研を充実させ、発展させたい。

	職員研修の改善	人権教育の基本的認識と実践力の向上	職員の校内・校外研修の充実	参加形態・レポート研修を精選し、効率的な啓発と実践発表等の改善を目指す。	B	本年度は1本のレポート研を少人数・分散方式で実施した。全職員が人権教育に関する学びを深め実践力を高めるためにも、校内レポート研の方法について、改良したい。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒への的確な対応	生徒の特性に合わせた支援	・生徒理解を踏まえた適切な支援の実践 ・個別の教育支援計画及び指導計画を基にした支援の充実 ・不登校傾向の生徒への支援とカウンセラー室の効果的な活用	・特別な支援を要する生徒に対する全職員の共通理解を図り、環境整備に努める。 ・保護者やSC、SSWを始め外部機関とも協力・連携を図りながら、サポート会議やケース会議を開催するなど、組織的な支援を進める。 ・外部講師による職員の研修を実施する。	A	・本年度、認定を受けた生徒は1名であった。別室利用によって、ほぼ休まず登校し、少人数の授業であればクラスで受講できるまでに改善した。今後は、リモート授業について環境整備を行い、希望者がいれば提供できるよう準備を進めたい。 ・特別支援教育委員会では、支援が必要な生徒について情報共有できたので、継続していきたい。
		ストレス反応を示す生徒への支援	・SCとの定期的な面談の実施 ・関係機関との連携	・学校や寮、家庭などの生活環境に起因するストレス反応を示す生徒をSCやSSWにつなぎ、ストレスの対処法を学ばせる。	A	・悩みを抱える生徒・保護者をSCにつなぐことができた。今年度は19名の受診があり，そのうち新規は8名であった。SCとの面談を通して，医療機関と連携がとれた生徒もいた。 ・面談希望が多く時間の調整が課題である。
いじめの防止等	生徒会「いじめ防止委員会」の活性化	「いじめ防止委員会」を中心に、いじめをなくす意識付けが、生徒に定着できたか。	全校生徒を対象にした「いじめアンケート」の実施と定着	スマートフォン等を使用した「いじめアンケート」と、そのデータをもとにした啓発活動	A	今年度はスマートフォン等を使用したアンケートを2回実施し、啓発を行った。生徒の活動としては軌道に乗りつつある。より簡単に全校生徒で実施できる最良の方法を模索中である。
	職員のいじめや生徒への対応に関するスキルアップ	いじめの未然防止・および早期対応が適切にできたか。	いじめの等のトラブルの減少と、教師・生徒間の良好なコミュニケーションの構築	スマートフォン等による、新たな「いじめ」対応の窓口の設置と、スクールカウンセラーによる職員研修の実施	A	・心のアンケート、いじめ防止対策協議会等、担任・学年を中心に連携し、組織的に対応することができた。スクールカウンセラーを交えた研修は、次年度に検討中である。
地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ・ｽｸｰﾙなど）	情報発信	地域への丁寧な情報発信	HP・ブログの改善による配信の充実	・簡便に情報把握ができるよう、CMSの特性を生かしたリデザインを図る。 ・年度当初の14万ビューから、倍増を達成する。	A	・HPを一部修正し、Google-Classroom,ｺﾛﾅ情報,入試情報等への接続利便性をあげることができた。 ・閲覧数も年度当初の14万から,倍以上の30万ビューを達成した。
	コミュニティスクール	学校運営協議会（総合型）の実働	運営協議会（総合型）を実働させながら、学校課題を焦点化させる。	・地域と連携することで、どうしたら学校課題の解決を図ることができるか協議する。 ・ICTを活用した簡便で機動的なアンケート集約体制をつくる。	B	・新型ｺﾛﾅ感染症対策により学校での会議開催ができなかった。資料検討による意見交換に替えた。 ・保護者へのICT（Forms等）を活用した機動的なアンケート集約体制はできつつある。

図書館活動	読書活動の活性化	利用しやすい図書館作り	図書館からの情報発信の充実	・校内読書月間の実施 ・広報誌「らいぶらりぃたいむず」の定期的発行 ・特設図書コーナーや展示の工夫 ・HPブログでの情報発信	A	校内読書月間を7月と12月の2回実施し、「らいぶらりぃたいむず」を9回、新着図書案内を16回、及び図書館報を発行した。特設図書コーナーは毎月工夫し、HPブログには14回情報発信をした。
		朝読書の充実	生徒の朝読書に対する満足度7割以上	・読書計画に従い、3年間を見通して朝読書に取り組む。 ・新書・専門書に触れ、早期に入試を見据え、進路実現へ繋げる。	B	「朝読書」のアンケート結果より、68%の生徒が「朝読書」は必要な時間であると回答した。新たな取組として、3年生への受験対策読み物提供など、進路実現へ繋げた。
SSH	第二期実践型、研究開発課題「未知なるものに挑むUTO-LOGICで切り拓く探究活動の実践」の中間評価	UTO-LOGICを備えた人材育成の評価方法を開発する。	生徒対象にL・O・G・I・C5観点を問う学校独自問題「ロジック・アセスメント」の開発	SSH推進委員を中心に教科と連携して開発する。G Suiteを活用し、CBT形式による実施でフィードバック及び評価検証の円滑化を図る。	A	ルーブリック、チェックリストの開発ができたものの、ロジックアセスメントの開発が不十分である。一部試行に留まらず、全体実施する準備が必要。
			探究活動のガイダンス機能及び情報共有の機会の充実	ロジックガイドブック及びGS本によるガイダンスとGoogle Classroomによる探究に関する情報共有を充実させる。	A	Classroom運用で情報共有、ペーパーレスを図った反面、手元資料の不足、生徒間での連絡徹底の差が課題となった。1人1台端末の活用法と運用の模索が必要である。
		探究活動及び探究の「問い」を創る授業の実践の見える化”可視化”教科の枠を越えた授業の開発	探究活動の過程における職員・生徒の関わりの可視化	G Suiteを活用し、Googleドライブによる探究活動の過程の共有・情報交換を充実、探究の過程の可視化を図る。	A	Googleドライブ運用により、特に1学年でUSB廃止、データ共有・共同編集など新たな実践を進めることができた。次年度はカレンダーなど計画の可視化を図る。
			探究の「問い」を創る授業、教科の枠を越える授業の実践を共有する機会を設定する。	公開授業(探究の「問い」を創る授業)及び職員研修(探究活動の指導方法)を実施し、コンピテンシーベースの授業デザインの展開を図る。	B	コロナ禍で公開授業及びWS型職員研修が未実施。オンライン公開授業、デジタルWS型職員研修など授業・探究実践の共有機会を次年度は設定。
中高一貫教育	本校独自の中高一貫教育プログラムの開発と実践	中高接続を踏まえたカリキュラム・マネジメントの実施	新学習指導要領による教育課程を編成する。	教育課程検討委員会で具体的な取組を行う。	A	委員会で数度にわたる議論と検討を重ね、年度内に最終案がまとまる予定である。
		中高連携した学校行事・生徒会活動の充実	学校の新しい生活様式を踏まえた中での活動の充実	・生徒会を中心とした行事の工夫と実践 ・保護者（PTA）と一体となった行事の工夫	B	コロナ禍の中で創意と工夫を重ね、100周年記念イベントや文化祭を充実した内容で実施することができた。

4　学校関係者評価

　コロナ禍により評価委員会を書面開催としたため、以下に委員の意見を記載する。
・令和2年度はこれまで経験したことのない社会情勢で、先生達も大変なご負担になったことと思います。しかし最も大切なことも再認識できた状況でもあったことと思います。宇土高校らしさ、宇土高でなければできない活動を行っていき、地域における宇土高の存在意義や生徒の人生における大変重要な時期の学びを豊かなものにしていただけるようお願いします。PTAとしても全力でサポートできたらと思います。
・1学年の取組には、学習面でのリーダーの育成についての記載がありました。学習面で課題のある生徒への指導もよろしくお願いします。
・進路指導については、高1入学時の希望を目標とすべきと思います。高1では多くの生徒が高い目標を掲げています。目標へのモチベーションを維持する対策が必要ではないでしょうか。
・SSHの成果が出ており素晴らしいとと感じています。これが進学にうまくつながっていくような指導をお願いします。
・新型コロナで授業形式の変更や行事の中止があった中、昨年度より評価が高い項目があるのは職員、生徒の皆様の努力のおかげだと感じます。コロナが終息した後も、評価が高い項目については、引き続き継続されるのがよいかと思います。
・教科の授業の実践が「教師自身が楽しめる授業」となっているか。教師自身が授業を楽しめるということは、学習共同体としての雰囲気に変化をもたらし、学習意欲の向上につながると考えます。授業の場で生徒から「学ぶ」、「元気をもらう」・・・・ということは楽しめることの要因との一つと考えます。生徒からの学びを「教材化」して生徒に帰す。そこには「教えることと学ぶこと」の相互運動が生まれていると思います。
・「学びを止めない」取組や校内の消毒など、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策にご尽力いただき感謝いたします。特に3年生への配慮については、大変なご苦労があったものとお察しいたします。
・DVDでの保健委員会の「手洗いの方法」や「マスクの外し方」を見ても、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全校で心を配られていたことが分かりました。2020年度は、この対応に振り回されたことだと思います。
・大きな思い出となる体育祭を始め、いろいろな行事に制限があった中で、新しい大学入試制度に向けての高3生へのサポートもあり、心配りされている様子が、学年通信にもありました。現役生だけでなく、浪人している卒業生にもつながっている様子を、次回はお教え願いたいと思いました。
・SCや三者面談などで、保護者も含めて継続的にケアしなければならない家庭が多いことに気づかされました。教職員の負担も大きいと思いますので、教職員の心身両面のケアも気になります。
・宇土市のリーダーを育てるためにも、国際的な視野から宇土市のことを考えた高校生の意見・提案を聞いてみたいと思いました。
・宇土高校については、私の母校でもありますので、さらに魅力ある高校を目指してほしいと願っているところです。先日、後期入試の倍率が公表されましたが、今後、生徒数の減少や生徒の学力差への対応が考えられます。県内の私立高校については多くの学校で定員を満たしていると聞いていますので、宇土高校が少子化の中でいかに受検者を増加させるかは大きな課題と思われます。現在の中学生が高校にどのようなニーズを持っているのかを把握・分析し、スピード感と危機感を持って取り組むかにかかっていると思います。本校は県内外の多くの高校に進学していますが、私立高校の方がきめ細やかな対応や指導をされているところが多いようです。

5　総合評価

　本年度は、学校全体で新型コロナウイルス感染症感染症拡大防止に取り組みながら、いかに効率的・効果的に生徒の育成を行っていくかに力を注いだ。1学期の休校期間中にGoogle　Classroom等のツールを用いて遠隔指導の体制づくりを行い、学校再開後は対面型授業とオンライン指導のハイブリッド型システムに進化させたことは大きな成果であった。
　生徒募集に関しては、昨年度は地域の回覧板を活用した情報発信により効果を上げたが、本年度はコロナ禍により市の回覧板の回覧が中止となったため、活動は中学校での説明会への参加や職員による中学校への募集要項の持参・PRなどに留まった。
　SSH事業では、校外での研修や発表がほぼ実施できない状況であったが、オンラインでの研修や発表を積極的に導入し、限られた状況の中で効果的な取組とすることができた。特に7月に行ったオンライン研究成果発表会は、全国のSSH指定校に先駆けた試みであり、JSTからも高い評価を受けた。
　職員の自己評価では、30項目の平均値が3．1となり、昨年度の2．8より0．3ポイント向上した。これはコロナ禍の中で、職員が危機感を共有し、一体感を持って生徒の育成に取り組んだ結果であると思われる。項目別では、コロナ禍の中で充実した学校行事を実現した生徒会活動、種々の方法で生徒への情報発信を行った図書館活動が特に高い評価を得た。一方、インターンシップや上級学校のオープンキャンパスへの参加が制限されたキャリア教育は最も低い評価となった。

6　次年度への課題・改善方策

　次年度も感染症防止対策をしっかり行いながら、教育活動を行っていかなければならない。本年度中止した体育祭等の集団的活動を伴う学校行事も、教育的効果はきわめて大きく、次年度は様々な工夫をこらしながら実施できるようにする。
　また、本年度、本校は1人1台端末整備事業の先行実践校に指定されており、今後県のGIGAスクール構想の先導的役割を担うことになる。より教育的効果の大きい教授システムの開発を進めていく。同時に校務分掌も改変し、より機能性を持たせた組織とすることで、学校の活性化につなげる。
　本年から大学入学者共通テストが始まり、大学入試もより思考力、問題解決能力を問う形態へ移行しつつある。本校のSSH事業で育成を目指す生徒の資質・能力が大学入試でも真価を発揮できるよう検証と改善を進める。
　生徒募集については、高校入試において志願者が募集人員を下回る結果となった。中学生のニーズが高校のどんなところにあるのかを詳細に分析するとともに、在校生の満足度を上げる取組と地域への魅力発信を危機感を持って行っていく。受け手の側にたった情報発信を心がけていきたい。